

# 「研究ノート」 近世の茶人・三谷宗鎮の略歴

安孫子 芳 枝

## 【はじめに】

茶の湯の大成期とされる室町時代後期の村田珠光や武野紹鷗、そして千利休に関する研究は圧倒的である。しかし三千家が成立して茶の湯人口が増加する江戸時代については、まだまだ研究の余地がある。その一方で、茶の湯を語る時に「禅と茶」を関連付けて語られることが多いが、それは茶の湯が禅宗と深い関係を持ちながら発展したとされるのが通説だからである。茶と禅の関係をいう場合、『南方録』<sup>①</sup>・『禅茶録』<sup>②</sup>など江戸期に成立したとされる茶書があげられる。しかし、両書の実際の著者がどのような立場の人物であったかを含め、茶の湯と禅との結びつきが強く意識された背景についても明らかではない。そうした問題を考察することは江戸期の茶の湯史を検討する上でも、あるいは「茶禅一味」という思想を歴史的に位置づける上でも重要である。江戸時代に入ると武家・公家・町人という階層によるそれぞれの茶の湯の傾向がみられ、多様な茶人と茶風が現れた。茶人について考察する際にも単に行実をたどるだけではなく、儒者や大名や公卿や町人、さらには禅僧を含めた多様な交流関係を、三千家だけでなく分派した茶人たちについても見ていく必要があると思われる。

江戸中期の茶人三谷宗鎮は、茶道表千家流から一派をなした人物として大きな影響力を持ったことが知られており、関係図書にも多く紹介されながら、なお不透明な部分が多い。三谷宗鎮の経歴について知ることができるのは主に「茶

人系譜」や辞典類で、1、茶道三谷流の祖である。2、茶を表千家六代寛々齋に学ぶ。3、儒学を伊藤東涯に学ぶ。4、芸州浅野家に儒者格二百石で仕官した。<sup>(6)</sup> 5、『和漢茶誌』<sup>(7)</sup>（一七二八年）を著す。という情報が主な内容である。

たとえば生没年月日と号に関して文献によつて記述に異同がある。そうした問題を検討する史料として、寺田貞次著『京都名家墳墓録』（一九七六年、村田書店）に記述されている「三谷良朴墓」の碑銘があるが、墓碑そのものの所在が不明であった。たまたま、その所在を確認することができたので、実際の墓碑に刻まれた銘文との比較校註を試みたところ、いくつかの新たに明らかになった点や、問題点が見つかった。本報告においては、江戸期茶の湯史と禅宗の関係を考察する一助とするために、それらの問題点を踏まえて、今後、三谷宗鎮を含めた江戸期茶人のより具体的な研究を進める上での研究課題を提示しておきたい。

### 【三谷宗鎮の略歴の異同について】

江戸時代から平成まで出版された三谷宗鎮の略歴に関する記述がある三十九の書物と一つの碑文から調査した。結果、傾向や内容の変遷を知ることができた。

#### 一、生没年月日及び享年の異同について

生没年月日についてであるが、没年を記している三十一件すべてが寛保元年（一七四一）に没したという記述は共通している。没月日は五月となっているものが圧倒的に多く、日には十二日がほとんどである。五月十三日、又は七月没とするものの中に日にちを七日とするものもある。享年について記してあるのは十九件でそのうち七十七歳となっているのは十五件、七十四歳が一件、七十四（七十七とも）が三件であった。寛保元年（一七四一）に七十七歳

で没したという大方の情報から生年を寛文五年とするようになったのではないだろうか。

昭和五十年代からの書物には生年は寛文五年（一六六五）が記述されるようになった。以後、生年の異同は見られないが、没年を寛保元年（一七四一）として享年七十四か七十七とした昭和六十年（一九八五）の末宗廣著「茶人系譜（新版）」は生年を記述しない配慮が見られる。

## 二、号の異同について

号とされるものは七つ見受けられる。「南川（子）」「不偏齋」「良朴」「丹下」「不倚齋」「不易齋」「一偏齋」である。号として記載されているもの、もしくは号とはつきりしない場合でも初世三谷宗鎮を示すときは（碑銘など）算入した。

号について問題としたいのは「不偏齋」という号についてである。江戸時代から大正時代までの出版物には「南川子」「不偏齋」「良朴」の三名称が号として固定していたのが、昭和十一年（一九三六）の「古今茶人綜覧」から「不偏齋」以外の齋号が見え始める。昭和十年代と二十年代は「不偏齋」の他に「不倚齋」、「不易齋」が加えられるようになった。そして昭和四十五年以降出版された茶道関係の辞典類を始め、一般的な事典からは三谷宗鎮の号に「不偏齋」の文字は消え、ほぼ齋号は「不易齋」に統一されている。

## 【三谷宗鎮の碑銘】

寺田貞次著『京都名家墳墓録』（一九七六年、村田書店）は京都の地域ごとに緻密に墓を調査し、所在の寺院や墓地内の位置や墓石の形式の分類も行っている。三谷宗鎮の墓については「第一編中央部（下京）の第二寺町四條以

南及下寺町」の節に記載され、大雲院(8)の南部墓域中にあるとし、碑銘についての記述がある。

「南川三谷良朴之墓

南川子姓多々良、而為三谷氏、名義方、字良朴、初稱宗鎮、又稱丹下、號南川子、播州明石人、初失怙恃依某氏、少時伶俜蹉跎乎江南已、而上京師遂住焉居間數十年、出仕勢州、往反十里者數矣、其為人多趣、尚尤嗜茶、有意於紹鷗利休之事、後千宗左氏受秘訣、乃善言茶理、依倣于陸經蔡錄、著茶誌三卷、所居築茶室、戶庭滿然、瘦石斑苔佳木扶疎、取徑縈紆深邃頗有山谷之幽致、凡其茗集野服執器、意象閑雅尚折中度、晚年患眼不改其度、學茶禮者日益衆、又為鬪茶之會、請泉谷百拙及余詩以紀之好事家以為韻事、寛保元年秋七月十七日病没、年七十四男一人名良中、女一人早亡。

寛保元年八月廿三日

南湖堀正修誌

孝子頼良中立」

以上の通りである。

一方、碑銘が刻まれている初世三谷宗鎮(9)の墓は現在、京都岩倉の本光院(10)にある。字の摩耗も見られるが、文字の判読は可能であった。

調査した結果、数か所の相違と欠字が判明した。

〈校註後の碑銘(11)〉

南川三谷良朴之墓

南川子姓多々良而為三谷氏。名義方字良朴。

初稱宗鎮又稱丹下。號南川子。播州明石人。(1)幼

失怙恃依某氏。少時伶俚蹉跎乎。江南已而上

京師遂住(2)為居間數十年。出仕(3)藝州往反(4)千里

者數矣。其為人多趣尚尤嗜茶。有意於紹鷗利

休之事。(5)從千宗左氏受秘訣。乃善言茶理依倣

于陸經蔡錄著茶誌三卷。所居築茶室戶庭滿

然瘦石斑苔佳木扶疎。取徑縈紆深邃頗有山

谷之幽致。凡其茗集野服執器意象閑雅。尚折

中度晚年患眼(6)亦不改其度。學茶禮者日益衆。

又為鬪茶之會請泉谷百拙及余。詩以紀之好

事家以為韻事。寬保元年秋七月十七日病沒。

年七十四男一人名良中女一人早亡。

寬保元年八月廿三日 南湖堀正(7)脩誌

孝子(8)頌良中立

『京都名家墳墓録』の「三谷良朴墓」に記述されている碑銘と違う文字は四角で囲み、追加した文字は網掛けで示した。↓の下の文字は『京都名家墳墓録』に書かれている文字である。

(1)幼↓初 (2)為↓焉 (3)藝↓勢 (4)千↓十 (5)從↓後 (6)亦↓追加した文字 (7)脩↓修 (8)頌↓頼

以上が校註箇所である。

（読下し）

南川三谷良朴の墓

南川子、姓は多々良にして三谷氏たり。名は義方、字は良朴なり。

初め宗鎮と称し、又丹下と称す。号は南川子なり。播州明石の人。

幼くして怙恃を失して、某氏に依る。少時に伶俚し、蹉跎すや。

江南を已にして京師に上り、遂に住し、居間すること数十年なり。

芸州に出仕し、千里を往反すること数なり。

其の人たるや多趣にして尚、尤も茶を嗜む。

意は紹鷗、利休の事に有り。千宗左氏より秘訣を受く。

乃ち善く茶理を言い、『陸経』・『蔡録』に依倣して茶誌三卷を著す。

所居に茶室を築き、戸庭は満然にして瘦石、斑苔、佳木は扶疎なり。

径は縈紆に取り、深邃は頗る山谷の幽致有り。

凡、其れ茗には野服が集い、器の意象は閑雅を執す。

尚、中度には折なりて晩年は眼を患うも、亦其の度を改めず。

茶礼を学ぶは日ごと衆に益す。

又、鬪茶の会を泉谷百拙及び余を請してなす。

詩以て之を記し、好事家以て韻事とす。

寛保元年秋七月十七日病没す。年七十四。男一人、名は良中。女一人、早亡す。

寛保元年八月廿三日 南湖堀正脩が誌す。

孝子頌して良中が立つ

### 【異同事項の検証】

碑銘の内容で明らかになった異同事項の検証の結果を整理する。

- (1) 没年月日については寛保元年七月十七日。
- (2) 享年については七十四。

- (3) 号については南川子と明記。良朴は号ではなく字。齋号については記されていないので不偏齋、不易齋、不倚齋、一偏齋の号に關しては不明。

碑銘が書かれたのは宗鎮が没したわずか一か月後の八月二十三日であり、墓碑を建てたのは嫡子の良中であることから、没年月日や享年についての信憑性は高く、三谷宗鎮の没年月日は寛保元年（一七四一）七月十七日と確定できる。また生年についてはこれまで一六六五年（寛文五）とされているが、享年から逆算すると一六六八年（寛文八）となる。

### 【齋号について】

異同がみられた齋号については碑銘では明らかにできなかった。宗鎮の著書『和漢茶誌』は版心書名になっていてその柱に「不偏齋藏書」と印刻されている。このような事例から不偏以外の齋号を使用していたのかどうかは明らかにできないが、「不偏齋」という号は確実に使っている。

「不倚齋」・「不易齋」の号が現れた『古今茶人綜覧』昭和十一年（一九三六）を見ると「三谷宗鎮」の項目の箇所  
 に「表千家六世原叟宗左門下、名は良朴、號丹下・南川子・不倚齋宗鎮・不易齋宗鎮・宗鎮と順次改称…」とあり、  
 次の項目は「三谷宗鎮二世」である。前項の「三谷宗鎮」は代々茶名とした「三谷宗鎮」の説明と「三谷宗鎮初世」  
 の説明の混合のように感じる。おそらく「三谷宗鎮」の項目で記載したかったのは表千家の流れを持つ茶家として代々  
 踏襲した名前であり、初世宗鎮は不偏齋、二世宗鎮は不倚齋、三世宗鎮は不易齋と順次改称したという意味ではなかつ  
 たか。「三谷宗鎮」とは別に「三谷宗鎮初世」の項目を立てなかったところに混乱が生じたようだ。同じ古今茶人綜  
 覧には「不偏齋」の項目もあり、そこには「三谷宗鎮」を参照するようになっていたが「三谷宗鎮」の項目には「不  
 偏齋」は載っていない。整合性がないのである。不偏齋は初世三谷宗鎮であることはそれまでの資料から確認できる。  
 二世三谷宗鎮の号は「不倚齋」、三世三谷宗鎮の号は「不易齋」ということは『古今茶人綜覧』以前の書物である河  
 津山白原輯『本朝古今新增書畫便覧』文化十五年（一八一八）、雪庭老人編『名家別號箋』文政六年（一八二三）、棲  
 霞亭編『茶人大系譜』天保三年（一八三三）、富永南陔著『茶人系傳』天保八年（一八三七）、東京図書出版編集『帝  
 国人名辞典』明治三十二年（一八九九）、石田誠太郎編『茶家系譜詳本』大正十年（一九二二）（三世宗鎮についての  
 記述なし）、柴山準行編『茶人系譜大全』大正十二年（一九二三年）等で確認できる。初世三谷宗鎮が「不倚齋」や「不  
 易齋」や「一偏齋」の号を使用していたのかどうか、道具の書付や直筆の署名などが見つかる可能性もないとはいえ  
 ないが、おそらく初世三谷宗鎮の齋号は「不偏齋」ひとつであり、「不倚齋」は二世三谷宗鎮、「不易齋」は三世三谷  
 宗鎮の号なのではないかと思われる。『古今茶人綜覧』での不明瞭な記載に端を発してそれ以後の初世三谷宗鎮の齋  
 号の不統一性が生じたのではないかと指摘したい。

## 【碑銘の内容】

三谷宗鎮について管見の限り新たに知り得た点を列挙する。

一、「多々良」という姓<sup>[12]</sup>であった

宗鎮に「多々良」という姓があつたことは初見であつた。名前は義方、字は良朴ということとは再確認できた。南川以外の号について、墓碑銘からは確認できなかった。

二、孤児であつた為に不遇な少年時代を送つたと記されている

播州明石の生まれということまではわかつて、宗鎮の出自については手掛かりがなかつたのが、孤児であつた為に記録もないことは納得できた。不遇に過ごした少年時代があつたというのは新たな認識であつた。

三、茶風について

住いに築いた茶室の庭は自然のままの景色を愛で、一見手を入れていないような雑然とした様子でありながら、そこには亭主宗鎮の趣向がある。粗末な服で特別な道具を用いずに茶を行ったことが示されている。質素で気負わないながら風雅さを保っている茶風を伝えていると考える。

四、晩年に目を患っていた

五、百拙元養と堀南湖との交流

百拙元養と堀南湖が碑銘に登場したことは宗鎮の交流関係を紐解く重要な足掛かりになる。

百拙元養と茶の湯の湯の関わりについては筒井紘一著『茶の湯と仏教』（二〇一九年、淡交社）に詳しい。近衛家熙<sup>[13]</sup>と茶の湯の親密な交流に注目している。家熙の周囲には宮廷公家貴族や学者、文人、数寄者と呼ばれる文化人が集つ

ていた。その中には百拙元養をはじめ伊藤東涯や堀南湖が名を連ねる。家熙に近い文化人達と三谷宗鎮は親しかったという関係性が見えてくる。

この碑銘を記したのが堀南湖である。『和漢茶誌』の跋も堀南湖が書いていることから、宗鎮と南湖の親しさが垣間見られる。故人の事績や人となり、そしてその遺徳を伝えようとの願いは友人門弟、とりわけ遺族には切なるものがあり、自然と依頼されるのは昵懇の名士ということになる。その適任者が堀南湖であった。遺族関係者に応えるべく故人の遺徳の顕彰という面を考慮して誇張された表現もあることをふまえなければならぬ。しかし、堀南湖の一文は感情に流されることなく、事績を留めている。長く故人を伝えるための基準事績となるこの墓碑銘は故人を知る上で好個の資料といえる。

六、子供は良中という男子がおり、女子がいたようであるが幼くして亡くした

嫡子の良中が墓碑を立てたことは、これを周知して後継者を知らしめる意味もあったと考えられ、碑銘の内容も保証されることになる。

妻については記されていないが、並んでいる墓石の中に「善女」や「信女」、「童女」の法号が見られ、延享や宝暦年間と刻まれている。これらが歴代宗鎮の妻や女子の墓石とみられるが初世宗鎮の妻を特定することは現段階ではできなかつた。

### 【今後の研究課題】

三谷宗鎮の碑銘を読み解くことで、三谷宗鎮の没年月日の確定ができ、茶風や人的交流についても知ることができた。少ない三谷宗鎮の研究材料の中にあつて貴重な情報と内容である。

谷端昭夫氏による「近世茶の湯研究の手引き」<sup>(14)</sup>では、十七世紀後半から十八世紀の茶の湯研究の課題について1、「茶の湯の定着・流儀化」、2、「各地域への普及展開」、3、「出版物による茶の湯の再編促進」、4、「新たな大名・茶匠の出現」などの究明が課題となると提示されている。全体像を知る手掛かりとして個別の課題は重要であるとの指摘である。三谷宗鎮の研究はこれら研究課題を究明することに繋がると考える。

まず、1、「茶の湯の定着・流儀化」については、表千家の弟子ながらどうして一派を築くことができたのか。三谷宗鎮は原叟四天王と称されるほどの重要な門人であった。茶の湯人口の増加によって、受け入れる指導者が必要であったことは考えられる。家元制度導入の前だったので免許皆伝によって独立できた最終盤の人物である。その後、流儀化の必要性から一子相伝という家元制度が創出され、茶の湯自体も茶家の体制も大きく変わる過渡期であった。茶の湯人口の増加の対応として分派もそのひとつの方策であり、三谷流として一派を開くことができたのである。

次に2、「各地域への普及展開」、と4、「新たな大名・茶匠の出現」については諸藩へ仕官した茶頭役の役割の検証もこれからの研究に求められている。その意味でも宗鎮の広島藩への儒者格ながら茶人として仕えることになった実際の活動に注目したい。広島藩といえは上田宗箇<sup>(15)</sup>の茶の湯が伝承されて今に至る。顕然たる大名茶の宗箇流の存在と当時、町衆に広まった振興の茶の湯の教授者三谷宗鎮の役割はどのようなものであったか検証が必要である。

そして3、「出版物による茶の湯の再編促進」、については『和漢茶誌』は旺盛な出版需要の時期において刊行された茶書である。著書の『和漢茶誌』についての現代語訳や注釈もされておらず、著者の主張の開示は取り組まなければならぬ。また、宮内庁書陵部に架蔵されている『茶道三三谷藏書』は「織部百ヶ条」の研究書と位置付けられる。一条ずつ宗鎮の解説や意見が加えられている。これらの著書は宗鎮の茶風や十八世紀初頭の茶の湯界の様子も知るこのできる素材である。茶書研究も課題のひとつであり、三谷宗鎮の茶書の考察は重要である。

これら個別の課題の検証を行い、碑銘で知り得た事績と合わせて三谷宗鎮の全体像を明らかにし、江戸時代の茶の

湯界への影響を探っていききたい。

〈註〉

(1) 『南方録』は千利休から授かった茶道の心得や秘伝を記したとされる。立花実山編、元禄三年以降(一六九〇)成立。

(2) 『禪茶録』は茶の湯における禪の思想を明白にし、茶禪一味を説く。寂庵宗澤著、文政十一年(一八二八)成立。

(3) 三谷家は代々六世まで宗鎮を名乗り、五世まで芸州浅野家に仕えた。太平洋戦争により、八世で家元三谷家の家系は絶えた。三谷流家元引次として、高弟の菱沼雅香氏が三谷流を再興させた後、三谷流の「伝統と精神」を広く世の中に広めるため、「三谷流四ツ谷会」が発足。宮崎貴博氏が代表に就任し、多くの団体で茶道・武道の指導者として活動。日本の伝統文化普及を目指し広く発信。「茶を通して茶の心の育成」を理念としている。

(4) 表千家六代宗左(一六七八一—一七三〇) 覚々斎。久田宗全(五代表千家家元随流斎の兄)の長男で十二歳の頃千家に養子として迎えられる。十八歳にして宗左を名乗り、大心和尚より流芳軒の号を受け六代家元になる。紀州徳川家に茶頭として出

仕し、八代將軍吉宗より唐津茶碗を拝領、桑原茶碗と名付けられる。利休や宗旦のめざした茶の趣旨を理解しながらも茶の湯人口が増加する時勢に応じた茶の境地を目指した。法名は原叟宗左居士。(『不審庵』二〇一〇年、表千家財団法人不審庵)

(5) 伊藤東涯(一六七〇—一七三六) 名は長胤、字は源藏。伊藤仁斎の長子。父、伊藤仁斎の古義学を継承し、著述・校訂に励む。博覧強記で知られ、業績は百二十八部四百五十卷余り等身以上に達したとされる。紀州徳川家から五百石で士官を勧められたが応ぜず、終身仕官することはなかった。(『近世漢文学史』一九八七年、汲古書院)

古義堂文庫に蔵される門人録、伊藤東涯『初見帳』(宝永三年—元文元年、東涯三十七歳より三十余年の門人を著録)によると、三谷宗鎮は享保五年(一七二〇)二月六日に香川修徳の紹介で息子吉之助(良中)と共に入門している。その他宝永八年(一七一一)九月八日には百拙(註(11)参照)の名前も見られる。

香川修徳(一六八三—一七五五) 古方流の医師。

## (6)

姫路に生まれる。字は大沖・修庵。一本堂と号す。『和漢茶誌』の序を記す。上洛して医学を後藤良山に儒学を伊藤仁斎に学ぶ。著に『一本堂行余医言』『一本堂葉選』など。門人に山脇東洋・吉益東洞らがいる。(『京都大事典』一九八四年、淡交社) 三谷宗鎮は五代藩主浅野吉長に儒者格で召し抱えられているが、茶人として仕えたのであって学問方面に影響をおよぼした形跡はない。広島藩町家では茶の湯に堪能な呉服商や銀札元役の任にあつた者がいたが、名を伝えている有名な茶の湯者の世並屋江左・谷口勘兵衛・吉田屋彦次郎・野上屋南枝らは三谷宗鎮の流派に属していた。(広島県編『広島県史近世1』一九八一年・『広島県史近世2』一九八四年)

浅野家初代藩主長晟に広島藩儒員として堀杏庵が登用された。その後杏庵の長男の堀立庵、蒙菴、南湖と代々仕官した。堀南湖(註(11)参照)は宝永五年(一七〇八年)藩主吉長から禄二百石を与えられ、正徳五年(一七一五)側儒となった。同じく南湖の従兄である堀景山も宝永五年浅野吉長から禄二百石を与えられ享保四年(一七一九)に側儒となった。景山は世子宗恒の教育にあたり、宗恒襲封後は特に重用された。(広

島県編『広島県史近世1』一九八一年)

堀南湖は『和漢茶誌』の跋を書き、三谷宗鎮の墓碑銘も記した。堀景山は『和漢茶誌』の序を書いていいる。浅野家に重用されているふたりと親密な付き合いをしていた状況をふまえると、三谷宗鎮が浅野家に仕官したのは堀南湖・堀景山との関係が影響していると考えられる。

## (7)

## (8)

堀景山(一六八八—一七五七)江戸時代中期の漢学者。本姓、菅原。修姓、屈。名、正超。字、君燕・彦昭。通称、禎助。号、景山・垂山・曠徳堂。諡号、忠靖先生。墓、京都南禅寺帰雲院。京都の人。享保四年(一七一九)広島藩主浅野吉長に招かれて侍講となる。宝暦二年(一七五二)から本居宣長を寄寓させて教育した。父、堀蘭草のもとで儒学・医学を修め、景山は従兄南湖とともに学者として名声が高く、荻生徂徠・室鳩巢などからも人物を賞讃され、多くの儒学者・国学者と交わった。(広島県編『広島県史近世1』一九八一年)

『和漢茶誌』板本三卷。漢文体。

本山龍池山大雲院と号する。浄土系単立。本尊阿弥陀如来。昭和四十七年(一九七二)まで京都市下京区真安前之町にあり、移転して現在は京都市東山区に所在する。大部の過去帳が残され江戸期

以来の町人檀信徒の様子が伺える。江戸時代初期から近代に至るまで多くの儒学者や画家、茶人が葬られている。庶民の信仰とともに文人墨客と幅広く交流を深めるサロンとして賑わっていた。

- (9) 三谷宗鎮の墓は寺田貞次著『京都名家墳墓録』（一九七六年、村田書店）では初版された一九二二年には大雲院にあったことが確認できる。しかし、一九七二年に大雲院は京都市東山区に移転してから墓地が分割・整理され、三谷宗鎮の墓は所在不明となった。『京都大事典』（一九八四年、淡交社）や『国史大辞典』（一九九四年、吉川弘文館）の三谷宗鎮の箇所には墓地は大雲院となっており、移転後は確認されなかった。筆者が大雲院を訪ねて聞いたところ、所在はわからなかったが、かつて墓があったことを伝えるとご協力いただき、大雲院の塔頭だった本光院に移されたという記録を見つけてくださった。その情報を頼りに岩倉の本光院の墓地で五世を除く初世三谷宗鎮から七世三谷咲子までの歴代の墓石他、九基を確認した。初世三谷宗鎮の墓は高さ約一メートルほど、砂岩質の墓石で割れた部分はコンクリートで補修し、針金で留めてあり、字の摩耗が見られる。浄土宗海雲山本光院と号する。大雲院の元塔頭で

## (11)

〔碑銘語彙〕

- 天正十八年（一五九〇）に第一世聖蓮社教誉寿光上人により開基、駿河守山口直友によって創建され洛中寺町四条に建立された。昭和五十九年（一九八四）岩倉幡枝に寺域を拡張し、移転した。駿河守山口直友の墓碑を安置し、三谷宗鎮歴代の墓の他、村瀬栲亭（儒学者）、芥川丹邱（儒学者）らの墓がある。（本光院落成記念冊子より抜粋、一九八四年）
- \* 怙恃：父母。両親。
  - \* 伶俜：ひとりさまようこと。
  - \* 蹉跎：落ちぶれること。不遇なこと。
  - \* 江南：不明。
  - \* 千宗左：表千家六代覚々斎。表千家は代々宗左を名乗る。
  - \* 陸經：陸羽（唐代七三三―八〇四）の著した『茶經』（七六〇年頃成立。三巻。茶の歴史・製法・器具について記述した最古の書）
  - \* 蔡録：蔡襄（北宋一〇二一―一〇六七、宋の四大家のひとり）の著した『茶録』（一〇五一年頃成立。上下二巻。茶論と器論）
  - \* 依倣：まねること。
  - \* 扶疎：枝葉が広がること。

\* 榮紆：まがりくねる。

\* 茗：茶。特に上等ではない茶。

\* 茶礼：茶の湯の礼式、礼儀作法。

\* 闘茶：中国宋から渡来し、茶を飲み分けて勝負を競い、鎌倉末期から室町中期にわたって日本では爆発的な人気をよんだ。江戸時代中ごろに千家七事式の茶カブキとして今日に至る。

\* 泉谷百拙：百拙元養（一六六八—一七四九）京都出身。江戸時代中期の僧。黄檗宗。大随玄機の法をつぐ。近衛家熙の帰依をうけ京都郊外に

法蔵寺をひらく。詩歌、茶道、書画をよくした。

\* 南湖堀正脩（一六八四—一七五三）堀南湖。江戸時代中期の儒者。堀杏庵の曾孫。堀景山の従兄。母は木下順庵の娘。広島藩主浅野家につかえる。京都出身。名は正脩。

(12) 「姓」は血統や家系の由来を示す名称で同一の祖先から出た部族名であるが、「多々良」姓は任那国王の後裔や周防、相模地方などにみられ、平民につながる場合もある。（丹羽基二著『日本姓氏大辞典解説編』一九八八年、角川文庫）この碑銘の「多々良」の詳細は不明である。「氏」は同姓中の系統の区別や家柄・職業・地名などを示し、「多々良」姓と「三谷」氏との関係性についても不明である。

(13) 近衛家熙（一六六七—一七三六）関白基熙を父に

後水尾院皇女常子内親王を母として生まれる。元禄六年（一六九三）右大臣、宝永六年（一七〇九）

摂政太政大臣に達する。その後まもなく致仕して落飾して予楽院と号する。晩年は仏事のかたわら茶道・香道・華道の秘奥を極めると同時に和漢学

に通じ、有職故実に明るく、書画・和歌にも秀でる。（柴田實「槐記」『茶道古典全集第五巻』一九五八年、淡交新社）

(14) 谷端昭夫「近世茶の湯研究の手引き」『日本茶の湯全史第二巻近世』二〇一四年、思文閣出版

(15) 原叟四天王とは覚々斎の弟子の有力者四名。上野宗吟又は（吉見喜斎とも）、服部道円、鈴木宗閑、三谷宗鎮。いずれの人物も名前のみが伝わり、詳細は不明。

(16) 上田宗箇（一五六三—一六五〇）広島藩の家老であった上田重安。茶の湯宗箇流の流祖。茶をはじめ千利休に学び、後に古田織部に師事。上田家は浅野家の家老であったので宗箇流の家元の名を称えただけで実際の教授は家臣である預かり師範の野村家・中村家が代々伝えて、藩の茶事を行うとともに武士や町人の数寄者の間に広まった。（桑田忠親『本朝茶人伝』一九八〇年、中央公論社）